



宮崎市制 90 周年記念事業

生目古墳群シンポジウム 2014

生目古墳群の

実像

～15年目の

再検討～

講師のご紹介

あいさつ

本市は、大正13年に市制施行し、今年で90周年を迎えるました。その間、昭和の大合併により、同26年に瓜生野村、倉岡村、木花村、青島村の4村、同32年に住吉村、同38年に生日村、平成の大合併により、同18年に佐土原町、田平町、高岡町の3町、同22年に清武町と合併しました。その結果、人口は約40万人、面積は約645㎢となり、県都として、また南九州の中核都市として、教育、文化、交通等あらゆる面にわたって、発展を続けております。

生日古墳群は、旧生日村時代の昭和18年9月に国指定を受けました。本市との合併後、航空測量による地形図の作成や、古墳群の保全区域案の設定、約14haを対象として境界点測量を行うなど、古墳群保護の環境設定に努めてまいりました。

平成5年度からは、市制70周年事業として、生日古墳史跡公園整備専門委員会の貴重なご意見をもとに、本格的な発掘調査を実施するとともに、整備を進め、平成20年度に開園の運びとなりました。

今回のシンポジウムは、委員会の先生方に、多角的な視点から、ご講演、ディスカッションしていただく予定で、その魅力を大いに語っていただけるものと思っております。皆様には、どうぞ、太古の時代に生きた人々に思いをはせ、合わせて、生日古墳群の魅力を堪能していただきますよう、お願い申し上げます。

結びに、シンポジウムを開催するにあたりまして、大変なご尽力を賜りました生日古墳群史跡公園整備専門委員会の委員の皆様に、心から感謝申し上げます。

平成26年11月1日
宮崎市長 戸敷 正

日程

9:30	開会 あいさつ
	宮崎市長 戸敷 正
9:35	生日古墳群の概要
	宮崎市教育委員会 文化財課主任技術 石村友規
9:50	基調講演
	「古墳からみた4・5世紀の南九州とヤマト王権」
	大阪府立近づ飛鳥博物館長 白石太一郎 氏
10:50	休憩
11:00	パネルディスカッション
	「生日古墳群の実像～15年目の再検討～」
	パネリスト
	宮崎県立考古博物館長 石野博信 氏
	大阪府立近づ飛鳥博物館長 白石太一郎 氏
	九州歴史資料館長 西谷 正 氏
	宮崎大学名譽教授 柳沢一男 氏
	コーディネーター
	宮崎県文化財課専門主幹 北郷泰道 氏
12:30	閉会

目次

I	講師紹介 1
II	生日古墳群資料 2
	生日古墳群の概要 2
	生日古墳群 2
	及び周辺主要古墳・古墳群位置図 3
	生日古墳群主要古墳位置図 4
	生日古墳群発掘調査・整備のあゆみ 5
	古墳・地下式横穴墓模式図 6
	生日古墳群地下式横穴墓位置図 7
	生日古墳群主要古墳概要 8 ~ 16
III	基調講演 17
	「古墳からみた4・5世紀の南九州とヤマト王権」 17

パネリスト



石野 博信 氏

1933年宮崎県生まれ。1961年関西大学大学院修士課程修了。兵庫県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所調査課長、研究部長、副所長兼附属博物館長、徳島文理大学教授、香芝市二上山博物館長などを経て、現在、兵庫県立考古博物館長、香芝市二上山博物館名譽館長。1996年から生日古墳史跡公園整備専門委員会委員。主な著書に『古墳文化出現期の研究』、『古墳時代史』、『日本原稿・古代住居の研究』、『古墳時代を考える』、『邪馬台國の考古学』、『大和・經向遺跡』などがある。



白石 太一郎 氏

しらいし・たいちろう

1938年大阪府生まれ。1968年同志社大学大学院博士課程満修退学。(財)古代学会、奈良県立橿原考古学研究所、国立歴史民俗博物館、総合研究大学院大学、奈良大学などを経て、現在、大阪府立近づ飛鳥博物館長・國立歴史民俗博物館名譽教授・総合研究大学院大学名誉教授。専攻は日本考古学。考古学の立場から日本の古代国家・古代文化の形成過程を追究。1996年から生日古墳史跡公園整備専門委員会委員。主な著書に『古墳と古墳群の研究』、『古墳と古墳群の文化』、『考古学からみた倭國』、『古墳とヤマト政権』、『古墳の時代史』、『考古学と古代史のあいだ』、『古墳からみた倭國の形成と展開』などがある。



西谷 正 氏

にしたに・ただし

1938年大阪府高槻市生まれ。1966年京都大学大学院文学研究科修士課程修了。奈良国立文化財研究所、福岡県教育委員会、九州大学を経て、九州大学名譽教授。その後、佐賀県立名護屋城博物館長・伊都国历史博物館長を歴任。現在、海の道むかた館長・九州歴史資料館名譽館長・糸島市立伊都国历史博物館名譽館長。専門は朝鮮半島を中心とした東アジア考古学。1996年から生日古墳史跡公園整備専門委員会委員。主な著書、叢書に『朝鮮考古通鑑』、『古代朝鮮と日本』、『考古学による日本歴史』、『東アジア考古学辞典』、『魏志倭人伝の考古学―那馬台國への道』、『古代日本と朝鮮半島の交流史』などがある。



柳沢 一男 氏

やなぎわ・かずお

1947年群馬県生まれ。1970年国学院大学文学部史料科卒業。福岡市教育委員会、宮崎大学教育学部助教授経て、1996年から宮崎大学教育学部教授(1999年より教育文化学部)、現在、宮崎大学名譽教授。1996年から生日古墳史跡公園整備専門委員会委員。主な著書、論文に『古墳の変質』『古代を考える古墳』、『描かれた黄泉の世界—王塚古墳』、『韓國の前方後円墳と九州』、『古代日本の異文化交流』、『生日古墳群と日向古代史』、『那馬台國時代のケニギニ南九州』、『筑紫君磐井と「磐井の乱」岩戸山古墳』などがある。



北郷 泰道 氏

ほんごう・ひろみち

1953年宮崎県都城市生まれ。立正大学文学部史料学考古専攻卒業。1980年から、宮崎県教育文化課で県内遺跡の発掘調査に携わる。2000年から、西都原策策班主として、西都原古墳群の発掘・活用事業及び西都原考古博物館建設事業を統轄。宮崎県立西都原考古博物館、宮崎県埋文化財センター所長を経て、現在、宮崎県教育文化財課専門主幹、南九州大学非常勤講師。2007年から生日古墳史跡公園整備専門委員会委員。主な著書に『熊襲・隼人の原像—古代日向の陰影』、『西都原古墳群—南九州扇指の大古墳群』、『古代日向・神話と歴史の間』、『海にひらく古代日向』などがある。

Ⅱ 生目古墳群資料

生目古墳群の概要

1. 古墳群の立地と環境

生目古墳群は市街地から北西に直線距離で約6km、宮崎市大字跡江にある跡江丘陵上とその周辺に点在する古墳の総称です。丘陵の平面形は長靴のような形をしていて、東西1.2km、南北1.3kmにわたります。丘陵の北西部と中央から南東部では地形が異なっていて、北西部は谷があり組んだ複雑な地形をしていますが、中央から南東部は比較的平坦な地形で、50基を数える古墳のほとんどはここに築かれています。丘陵から1kmほど位置に大淀川が流れていますが、内陸部から東流してきた大淀川が南へと大きく流れを変える地点にあたっています。

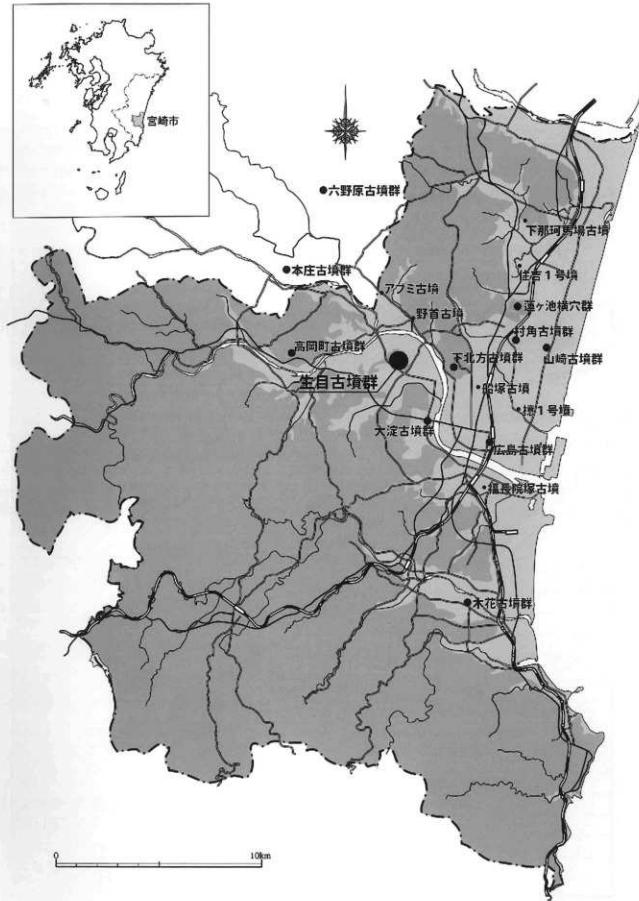
2. 生目古墳群の実像

生目古墳群の実像を知る上で、重要なポイントが二つあります。

一つ目は、3世紀中頃から4世紀後半、古墳時代前期という時期に、100mを超える規模の前方後円墳を3基造った九州唯一の古墳群であるということです。生目古墳群には1号墳、3号墳、22号墳と3基の100mを超える前方後円墳がありますが、1号墳が4世紀前半、3号墳が4世紀中頃、22号墳が4世紀後半に造られたと考えられています。このことから、生目古墳群がある大淀川下流域には、強大な権力をもつた人物が、3代にわたって存在したことがわかります。その中でも3号墳は墳長137mを測り、九州最大の前期古墳です。

二つ目は、列島各地に広がった前方後円墳というお墓の形と、南九州独自の埋葬方法である地下式横穴墓が密接に関わっている状況がみられるという点です。7号墳は5世紀後半に造られた墳長47mの小型の前方後円墳で、後円部南側の周溝から後円部の中心に向かって地下式横穴墓が造られています。レーダー探査の結果、遺体を納める玄室と呼ばれる場所が5m以上もある大規模なもので、後円部の中心を意識して造られている点も併せて、7号墳の中心埋葬施設である可能性が高いといえます。これは現在までのところ7号墳が全国唯一の事例であり、近畿中央部を中心として、全国的に岩手県から鹿児島県に広がった前方後円墳というお墓の形と、南九州独自の埋葬方法である地下式横穴墓が融合した例として、学術的に非常に重要な資料といえます。また生目古墳群では、現在まで56基の地下式横穴墓が確認されていますが、その多くが古墳の周溝内やその周囲に造られています。7号墳では前述の後円部下の地下式横穴墓を合わせて10基、21号墳では13基の地下式横穴墓が確認されるなど、多数の地下式横穴墓が前方後円墳に伴う事例が確認されています。ただし、ほとんどの地下式横穴墓は、前方後円墳が造られた後、しばらく時間が経過してから造られていることも明らかになっており、前方後円墳に葬られた人物と血縁関係など、何らかの関係性がある人物が、時間を経た後に葬られているのではないか、と考えられています。地下式横穴墓の起源を考えると、生目古墳群では重要な発見がなされています。21号墳の周溝から見つかった43号地下式横穴墓は、その築造年代が5世紀前葉に遡ると考えられます。從来、えびの盆地で5世紀初頭に成立した地下式横穴墓が、宮崎平野部に伝播していくと考えられていましたが、ほぼ同時期の地下式横穴墓が生目古墳群で見つかったことで、その成立過程や伝播について、もう一度検討する必要が生じています。

このように、生目古墳群では発掘調査によって新たな知見が次々と確認されています。現在発掘調査中の1号墳も、新たな位置付けがなされるかも知れません。発掘調査により新たな歴史が発見される瞬間を目の当たりにできる点も、生目古墳群の魅力の一つといえるでしょう。



生目古墳群及び周辺主要古墳・古墳群位置図



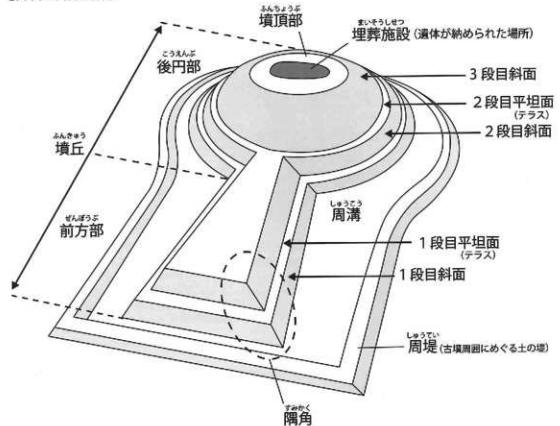
生目古墳群主要古墳位置図 (S=1/4000)

■生目古墳群発掘調査・整備のあゆみ

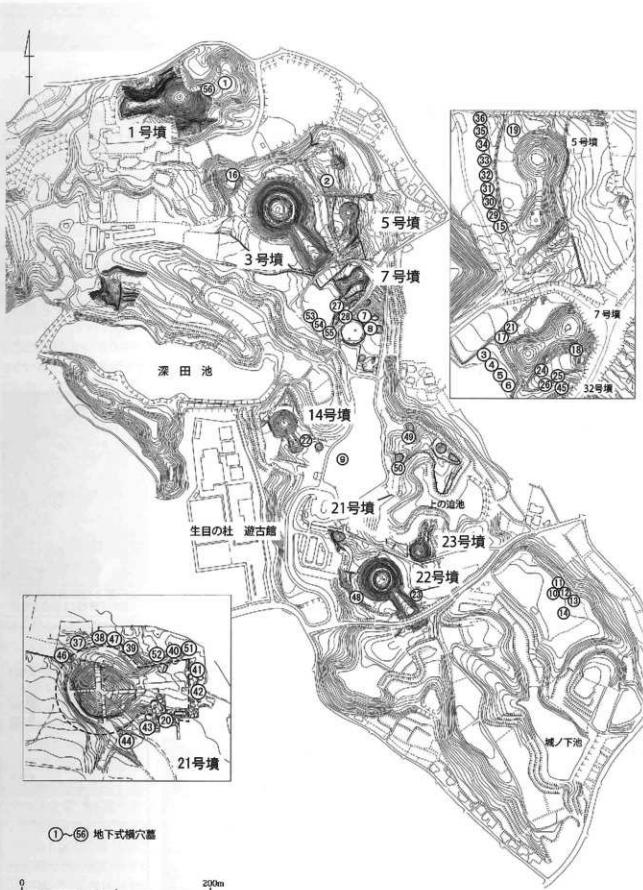
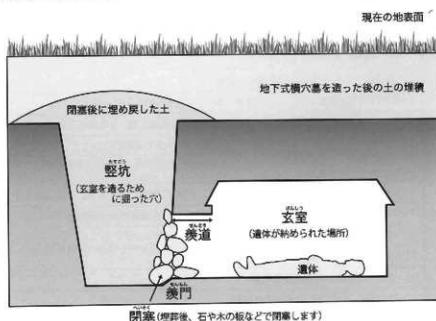
年代	事柄
昭和10年代	徳地一氏が、「古墳案内略図」(略地図)を作成 (勝江台地上に前方後円墳8基、円墳27基、台地下に円墳3基が描かれている)
昭和16(1941)年	原田仁氏が「3・22号墳の堆丘測量図を作成
昭和18(1943)年	43基の古墳（前方後円墳7基、円墳36基）が国史跡の指定を受ける（9月8日）
昭和36(1961)～昭和38(1963)年	上ノ追地改良事業がおこなわ、台地上の一部の古墳が消滅
昭和37(1962)年	古墳標石、埋界石、説明版を整備
昭和38(1963)年	生目村、吉崎市に合併
昭和48(1973)年	清掃工場建設とともにさく市と勝江地区の覚書に「生目古墳群の公園化」の一項が盛り込まれる
昭和48(1973)～昭和49(1974)年	土地造成工事にともない、新たに4基の横穴墓を確認。翌49年に消滅した横穴墓の追跡調査を実施し、土器、装身具、馬具、武具などの豊富な陪葬品をともなっていたことを確認
昭和50(1975)～昭和51(1976)年	航空測量による地形図及び、「生目古墳群保存管理計画検定書」を作成
昭和56(1981)年	生目古墳群整備促進期成同盟会結成
昭和57(1982)年	古墳群約14haを対象とした境界地測量を実施
昭和58(1983)年	城平地区に所在する51号墳の確認調査を実施し、周溝を確認
平成5(1993)年	「宮崎市創70周年記念事業」の一環として、(仮称)宮崎市総合スポーツ公園並びに生目史跡公園建設事業が計上される。生目古墳群公園化促進協議会結成
平成5(1993)～平成7(1995)年	生目古墳群周辺歴跡発掘調査を実施
平成8(1996)年	宮崎大学考古学研究室らによる前方後円墳及び、周辺円墳の詳細な堆丘測量図を作成 生目古墳群史跡公園整備委員会が発足
平成9(1997)年	「生目古墳群史跡公園整備基本構想・基本計画報告書」作成
平成9(1997)～平成10(1998)年	古墳群南側に位置する石ノ泊川2段落の発掘調査を実施 （消滅域と周溝内に希少された地下式横穴墓を発見）
平成10(1998)年	3・4・5・6・28号墳の発掘調査を実施
平成11(1999)年	3・5・7号墳の発掘調査を実施
平成12(2000)年	3・5・7・28号墳の発掘調査を実施
平成13(2001)年	5・7・8号墳の発掘調査を実施
平成14(2002)年	5・7・14・15・21号墳の発掘調査を実施
平成15(2003)年	5・7・14号墳の発掘調査、8号墳西側広場と7号墳堆丘のレーダー探査を実施
平成16(2004)年	5・7・8・10・22・29・33号墳の発掘調査、8号墳西側広場・9号墳周辺のレーダー探査を実施
平成17(2005)年	3号墳東側周堤・14・27・31号墳の発掘調査、16・19号墳周辺のレーダー探査を実施
平成18(2006)年	3号墳東側周堤・5号墳東側平場・7・14・32号墳の発掘調査、3・22号墳頂部レーダー探査実施
平成19(2007)年	3・4・7・21・28・31・32号墳の発掘調査、5号墳の整備工事を実施。史跡追加指定（2月6日）
平成20(2008)年	3・9・21・29・30・31号墳の発掘調査を実施。生目古墳群史跡公園開園
平成21(2009)年	3・9号墳の発掘調査を実施。生目の杜造古館開館
平成22(2010)年	21号墳の発掘調査を実施
平成23(2011)年	22・23・33号墳の発掘調査を実施
平成24(2012)年	16～19号墳、23号墳の発掘調査を実施
平成25(2013)年	1・33・35号墳の発掘調査、14号墳整備工事を実施
平成26(2014)年	1・33号墳の発掘調査を実施中

古墳・地下式横穴墓模式図

【古墳の各部名称】



【地下式横穴墓の各部名称】



生目古墳群地下式横穴墓位置図 (S=1/5200)

生目 1 号墳 (墳長 120m 以上)

【古墳の概要】

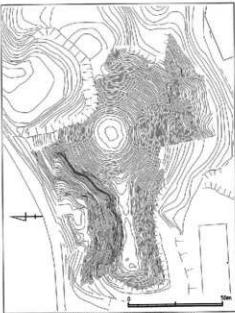
後円部：径約 73m、高さ約 13m
前方部：長さ 47m 以上、高さ 5m 以上
段築構造：後円部 3 段、前方部 3 段か
葺石：あり
周溝：狭小な丘陵上立地のためなし
おもな出土遺物：なし

1 号墳は丘陵の北端、他の前方後円墳がある跡江丘陵本体とは小さな谷で隔てられた、独立した小丘陵上に立地しています。現在はまだ史跡公園として整備されておらず、園路も敷設されていないため、見学会など以外では古墳に近づく機会はありません。

生目古墳群最古の前方後円墳として位置付けられている 1 号墳ですが、その年代は発掘調査の成果によるものではなく、古墳の形から検討したものです。柳沢一男氏は、原田仁氏が 1941 年に作成した測量図を分析し、大きく撥形に開く前方部に着目、箸墓古墳の測量図を二分の一に縮小したものと原田測量図に重ねると、墳端のラインが一致することを明らかにしました。つまり 1 号墳は、箸墓古墳の二分の一規模で設計された古墳であり、その時期も箸墓古墳から遅く遡ることなく、3 世紀末までには造られたと想定しました。その後、柳沢氏は宮崎県内の他の古墳の調査成果や、1 号墳の墳形、特に立面形を中心にして再検討し、箸墓古墳と同じ形ではなく、その年代は 4 世紀中葉から未葉に下る可能性を指摘しています。

生目古墳群の 100m 級前方後円墳の変遷を考える上で、造られた時期に注目が集まる 1 号墳ですが、平成 25 年度から発掘調査に着手しています。残念ながら、現在までのところ、時期を確定するような遺物は出土していませんが、後円部が 3 段に造られていることや、後円部の葺石が非常に良好な状態で残されていることが確認できました。一方で、後円部 3 段目斜面では、他に類を見ない階段状(波状)の特殊な葺石の施工方法が用いられていることなど、新たに解明すべき課題も見えてきました。今後も課題の解明に向けて、調査研究を継続する必要があります。

4 世紀前半 ?



填丘測量図 (S=1/2000)



後円部葺石検出状況



後円部 3 段目斜面階段状(波状)葺石(上から撮影)



生目古墳群主要古墳変遷図

生目 3 号墳 (墳長 137m)

4 世紀中頃

【古墳の概要】

後円部：径 77m、高さ 11m
前方部：幅 37m、高さ 6m
段築構造：後円部 3 段、前方部 2 段
葺石：あり
周溝：難穴形、前方部前面は幅が狭い
おもな出土遺物：なし

3 号墳は、丘陵北側の縁辺部に位置し、後円部を丘陵端側に向け築造されています。東側には近接して 5 号墳が築造されており、両古墳の周溝間には周堤が見られます。

宮崎大学による測量調査では、墳長 143m という数値が得られていましたが、発掘調査により 137m であることが明らかになりました。多くの古墳は端部が削られてしまっているため、発掘調査によって現況では失われていた古墳の端部の痕跡が見つかり、測量図よりも要領が大きくなることがあります。3 号墳の場合はその逆で、端部の残りが非常に良かったため、本来の填丘を覆った土を剥り除いた分だけ小さくなってしまった、ということになります。それでも、墳長 137m の 3 号墳は、生目古墳群最大であるのももちろん、九州最大の前期古墳であることは間違ありません。

発掘調査の結果、填丘は後円部 3 段、前方部 2 段に造られています。また填丘の斜面は葺石、平坦面は敷石が施されており、填丘表面すべてを石で覆った構造であることが明らかになりました。さらに填丘端部の外側には幅 1.5m 程度のテラスが巡りますが、そこでも石敷が見られることから、「古墳を石で覆う」ということに注力した古墳と言えます。その一方で、これまで 19ヶ所のトレンチを設定し、発掘調査をおこないましたが、3 号墳に伴う遺物は全く出土しておらず、埴輪や土器を用いた祭祀はおこなっていなかった可能性があります。

3 号墳の測量図をみると、後円部の 2 段目テラスの幅が非常に幅広くなっています。現地を訪ねると明確な平坦面があることに、誰も気づきません。以前は幅広のテラスをもつ特殊な形状の古墳という認識でしたが、発掘調査の結果、このテラス部分には古墳が造られてから 1,000 年ほど後の、戦国時代に「薬研窟」という防御用の溝が掘られていることが明らかになりました。戦国時代、3 号墳は砦のような施設として利用されていたのです。



填丘測量図 (S=1/2000)



前方部前面葺石検出状況



後円部 3 段目斜面薬研窟

生目 5 号墳 (墳長 57m)

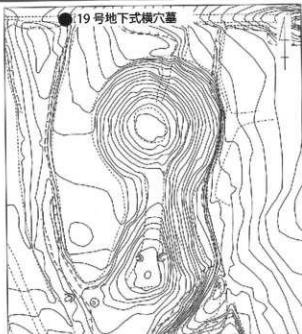
4 世紀末

【古墳の概要】

後円部：径 28m、高さ 4.5m
前方部：幅 22m、高さ 2.3m
段築構造：後円部 2 段、前方部 2 段
葺石：あり
周溝：あり（墳丘西側～北側まで一周しない）
埋葬主体：後円部にて平面プランのみ確認
(東西軸、長さ 5.7m、幅 2.6m)
おもな出土遺物：壺形埴輪

生目 5 号墳は、跡江丘陵東北の縁辺部に位置する前方後円墳です。周堤を挟んで西側には 3 号墳があり、古墳間が近接している点が特徴的です。墳丘の規模は後円部径 28m、前方部幅 22m、全長が 57m を測ります。平成 10 年度から平成 16 年度にかけて、生目古墳群では唯一全面調査をおこないました。発掘調査の結果、後円部・前方部がともに 2 段築成で、斜面には葺石を施していることがわかりました。1 号墳、3 号墳、14 号墳、22 号墳では墳丘平坦面にも敷石が見られますが、5 号墳で確認できなかったことから、生目古墳群では時期を経るにつれて、古墳の葺石・敷石が省略されていくことがうかがえます。埋葬施設については、後円部中心よりやや前方部寄りの平坦面で、東西に軸をもつ長方形の平面プランを検出しました。周溝については、3 号墳の周囲と土橋状につながった前方部西側の隅角を起点として、後円部背面の東側に確認されており、一周しないことがわかりました。出土遺物については、特徴的な形をした壺形埴輪が出土しました。原位置で出土した壺形埴輪は 3 カ所のみでしたが、破片の分布で東側の 2 段目平坦面に集中していたことから、埴輪は墳丘東側にのみ樹立していたと考えられます。また、西側くびれ部付近の周溝内では土師器（壺形土器）が出土しました。出土遺物の特徴から、5 号墳は 4 世纪末に造築されたものと考えられます。

また、5 号墳北西側の周溝外側で、19 号地下式横穴墓が確認されました。堅坑は 3.5m × 2.0m、玄室は 1.95m × 0.65m を測り、平面形が長方形の平入り形状になっています。堅門付近では、純度の高いシラス土が確認されており、板閉塞の支え、もしくはシラス塊そのものを閉塞に使用した可能性があります。堅坑内においては、直径 2.0 ~ 3.0 cm の柱穴を 2 カ所で検出しました。柱穴の位置が狭門から離れている事や、堆積状況の観察から、遺体埋葬後、堅坑が埋め戻されずに木蓋で閉塞されている可能性が考えられます。このような痕跡は、他の地下式横穴墓には見られないため、非常に特徴的であると言えます。出土遺物は、玄室内から鐵鉢が 2 点、堅坑内から土師器（小型の壺、壺、高杯）が出土しました。出土遺物の様相から、19 号地下式横穴墓は 5 世纪前半頃に造られた墓だと考えられ、生目古墳群で確認される地下式横穴墓の中では、比較的古いものに位置づけられます。



5号墳全景



出土遺物（壺形埴輪）

生目 7 号墳 (墳長 46m)

5 世紀後半

【古墳の概要】

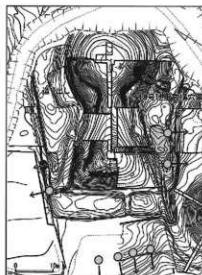
後円部：径 24m、高さ 3.9m
前方部：幅 26m、高さ 3.5m
段築構造：後円部 2 段、前方部 2 段
葺石：上段斜面のみ
周溝：馬蹄形
おもな出土遺物：土師器、須恵器、陶質土器、石製垂玉、石製小玉、石製紡錘車

7 号墳は 3 号墳前方部の南側、西から東へと下る浅い谷地形の中に位置します。その立地から丘陵縁辺部に所在するにもかかわらず、丘陵下からの眺望は優れています。とは言えません。

7 号墳が造られたのは 5 世紀後半で、生目古墳群最後の前方後円墳です。墳長は 46m で、生目古墳群最大の 3 号墳 (137m) と比較すると、約 3 分の 1 にまで縮小し、生目古墳群を造営した勢力の衰退が表れています。

墳丘は後円部・前方部共に 2 段築成ですが、葺石は上段斜面だけに施されています。後円部の北西側には周溝内に突出するように造られた「造り出し」と呼ばれる施設が見つかっています。この造り出しは、祭祀をおこなうステージのようなもので、周囲から祭祀に用いられたと思われる多量の土器が出土しています。

7 号墳の最も大きな特徴は、周溝内やその外線に近接する位置で、10 基の地下式横穴墓が発見されたことで、列島各地に広がった前方後円墳・南九州独自の埋葬施設である地下式横穴墓が共存している状況が確認されました。特に造り出しと反対側の後円部南側に造られた 18 号地下式横穴墓は、周溝内に堅坑を設け、後円部の中心に向け玄室を設けていることが判明しました。さらに発掘調査やレーダー探査によって、玄室の規模が 5 m 以上もある大規模なものであることが明らかになっています。また、周溝内の土の堆積状況から、18 号地下式横穴墓の堅坑は、周溝の掘削と同時に掘り込まれたと考えられています。これらの点から、18 号地下式横穴墓には 7 号墳を造った本人が埋葬されている可能性が高いと考えられ、その場合は全国で唯一の事例となります。ただし、玄室内の調査をおこなっていないため、18 号地下式横穴墓の詳細は明らかではなく、後円部頂上に堅穴系の埋葬施設の可能性がある土の堆積が見られるところから、前方後円墳と地下式横穴墓の関係性を明らかにするためには、今後も継続した調査が必要です。



墳丘測量図 (S=1/1000)
トーンは地下式横穴墓位置
矢印は玄室方向



7号墳後円部と18号地下式横穴墓



造り出し周辺土器出土状況

生目 9・33 号墳

【古墳の概要】

9号墳：径 34m、高さ 2.1m
33号墳：長さ 15m、高さ 1.4m
段築構造：なし
葺石：なし
周溝：あり

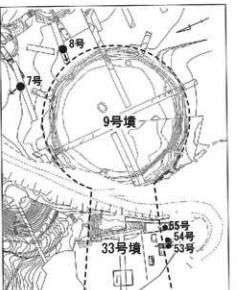
生目 9号墳、33号墳は丘陵北側の縁辺部に位置します。古墳近辺には直径 10m 程度の小円墳群と 7号墳が存在しています。古墳周囲は削平されており、33号墳はわずかに墳丘が残っている状態です。9号墳の墳頂部についても、墳丘面上には、通常見られる古墳築造後の堆積土がなく、すぐ上に 10～13世紀に降灰した火山灰が堆積していることから、墳頂部の広い平坦面は古墳本来の形状ではないものと考えられます。これまで、9号墳は現況で径 34m の大型円墳、33号墳は大きさ不明の小円墳と考えられていましたが、平成 23 年度の調査で 33号墳の周溝が 9号墳に向かって直線的に伸びていることがわかりました。これによつて、この 2基の古墳は 9号墳を後円部、33号墳を前方部とする一つの古墳である可能性が出てきました。前方部の長さはわかっていますが、全長 50m 以上の前方後円墳となる可能性があります。調査では、古墳にともなう遺物が確認できていないため、現段階では古墳の時期はわかりません。

9号墳と 33号墳の周囲では地下式横穴墓も確認されています。平成 6 年度の調査では、9号墳周辺で 2 基の地下式横穴墓（7・8号）を検出しました。

7号は、平入りの地下式横穴墓で、玄室は南向きに構築されており、9号墳とややそれた方向を向いています。竪坑は上端が $1.45 \times 0.85m$ の長方形の平面プランで、玄室は $2.0 \times 0.6m$ を測ります。羨道は無く、平面形は長方形で半ドーム状の天井となっていました。玄室内に遺物はなく、竪坑より鉄鏃とヤリガンカが出土しました。出土した遺物の様相から、5世紀中頃に造られた墓と考えられます。

8号は平入りの地下式横穴墓で、9号墳に向かって玄室を構築しています。竪坑は上端が $1.6 \times 1.1m$ のやや長方形の平面プランで、玄室は $1.8 \times 0.9m$ を測ります。羨道は無く、平面形は横円でドーム状の天井となっていました。玄室内からは、大型の刀子、鉄斧、鉄鎌、竪坑底面近くでは鉄鏃が出土しました。出土した遺物の様相から、5世紀中頃に造られた墓と考えられます。

平成 25 年度の調査でも、周溝内で 3 基の地下式横穴墓（53・54・55号）にともなう埴土を確認しましたが、検出にとどめているため、墓の構造や出土遺物など、詳細はわかりません。



周溝・墳丘検出状況（9号墳）



周溝検出状況（奥が 9号墳、手前が 33号墳）

生目 14号墳（墳長 63m）

4世紀後半

【古墳の概要】

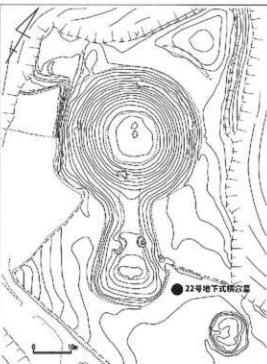
後円部：幅 39m、高さ 4.5m
前方部：幅 19.5m、高さ 1.8m
段築構造：後円部 2段、前方部 2段
葺石：あり
周溝：馬蹄形、前方部前面は周溝が巡らない
おもな出土遺物：埴輪

14号墳は古墳群の中央付近にあり、古墳が所在する場所は丘陵が谷に向かって舌状に突出した形状となっています。現在は史跡公園の入口に近く、平成 25 年度に整備を終了した姿を、すぐ目にすることができます。

発掘調査の結果、墳丘は良好な状態で残されており、後円部、前方部ともに 2段築成であることが明らかになりました。墳丘の表面のうち、斜面は葺石、平坦面は敷石、小砾敷で覆われていたことが確認されました。墳丘が良好に残されていた一方で、周溝は擾乱を受けている部分が多く、不明瞭な部分もありますが、東側周溝の状況をみると、5号墳と同じく前方部隅角で周溝は収束し、前方部前面には周溝がないと想定されています。

14号墳は多くの壺形埴輪が出土していますが、出土位置から後円部、前方部の埴頂平坦面に立て並べていたと考えられます。出土した壺形埴輪は、壺を縦に引き伸ばしたような特異な形状で、5号墳の埴輪と似ています。埴丘全面を石で覆い、壺形埴輪を立て並べた14号墳は、造られた当時、威容を誇ったことでしょう。

前方部東隅角付近の周溝内から、玄室を周溝外へ向ける地下式横穴墓がみつかっていますが、竪坑から出土遺物がなく、玄室の調査もおこなっていないため時期は不明です。



墳丘測量図 (S=1/1000)



壺形埴輪出土状況



後円部石壺出土状況(前方部から)

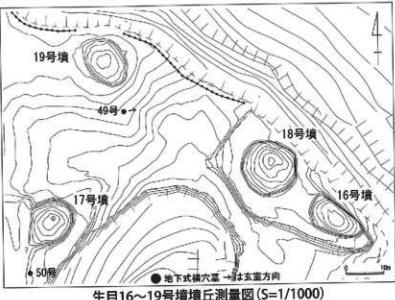


出土壺形埴輪

生目 16・17・18・19 号墳

【古墳の概要】

- 16号墳：径 16m、高さ 2.2m
周溝：不明
出土遺物：須恵器
(环身、环蓋、高杯、甕)
- 17号墳：径 15m、高さ 2.0m
周溝：あり
出土遺物 土師器
(高杯、甕、二重口縁器)
- 18号墳：径 17m、高さ 2.5m
周溝：不明、出土遺物：なし
- 19号墳：径 15m、高さ 1.6m
周溝：あり
出土遺物：須恵器
(环身、环蓋、高杯、甕)



生目 16~19 号墳測量図 (S=1/1000)

生目 16・17・18・19 号墳は、丘陵東側縁辺部の小さく舌状に飛び出した箇所に立地し、主な古墳からは少し離れてやや独立して存在します。平成 7 年度の調査では、19 号墳の周溝、古墳西側では土坑墓、円形周溝墓などが確認されています。平成 24 年度には、墳丘の焼損や時期などを知るために、本格的な調査をおこないました。

【16号墳】径 16m、高さ 2.2m の円墳です。古墳の南側と西側において周溝を検出し、周溝を手がかりに復元すると、本来は 17m の円墳であることがわかりました。南側の周溝外側斜面では、地下式横穴墓とそれにともなう土師器(高杯、甕、二重口縁器)が出土しました。

17号墳にともなう土器は見つかりませんでしたが、周溝内で見つかった地下式横穴墓にともなう土師器が 5 世紀中頃のものと考えられるため、17号墳はそれ以前に築造された可能性があります。

【18号墳】径 17m、高さ 2.5m の円墳です。16号墳と同様に古墳周囲は削平されており、周溝の有無は確認できませんでした。出土遺物についても、古墳にともなうものが確認できなかったため、古墳の構造や築造年代などは不明です。

【19号墳】径 15m、高さ 1.6m の円墳です。古墳の西側でのみ周溝を検出しました。出土遺物として、古墳北側の客土中から 6 世紀後半の須恵器が出土しました。本来これらの須恵器が、墳頂部に配置されていたものであれば、19号墳は 16 号墳と近い年代に築造されたものと考えられます。



16号墳墳頂部遺物出土状況



17号墳周溝内遺物出土状況

生目 21 号墳 (墓長 33m)

【古墳の概要】

- 後円部：径 20m、高さ 3.4m
前方部：幅 15m、高さは削平により不明
段築堤造：無段の可能性が高い
葺石：なし
周溝：鍵穴形
おもな出土遺物：土師器（底部穿孔二重口縁器など）

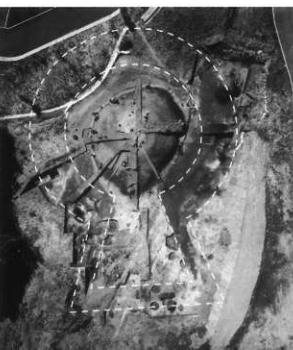
丘陵の西端、史跡公園入口のロータリー脇にあるため、公園に入ってすぐ目に留まる古墳です。

これまで直径 20m 程度の円墳と考えられていましたが、発掘調査の結果、墳長 33m の小方の前方後円墳であることがわかりました。墳丘は後世の削平により大きく失われていましたが、周溝はなく葺石も施されていませんでした。墳丘の周囲には鍵穴形の周溝が巡らされていますが、その周溝の底から大きな壺が数個出土しました。その中の一つは底に穴が開けられた壺形埴輪（底部穿孔二重口縁器）でもともと墳丘の上に並べられていたものが周溝内に転げ落ちたと考えられます。この壺の形から、21号墳は 4 世紀前半に造られたことがわかりました。

21号墳の最も大きな特徴は、周溝内から 13 基の地下式横穴墓が発見されたことです。7 号墳の地下式横穴墓とは異なり、墳丘内に玄室を向けるものではなく、全て周溝の外側に玄室を向けています。南側くびれ部にある 43 号地下式横穴墓では、堅坑上に供えられていたとみられる土器が出土しましたが、その土器の年代から 5 世紀前葉に造られたものとわかりました。これは宮崎平野最古の地下式横穴墓で、地下式横穴墓の成立地と考えられている、えびの盆地のものとほとんど変わらない時期でした。のことから、今後地下式横穴墓の成立や伝播について、再検討する必要性があります。



墳丘測量図 (S=1/1000)
トーンは地下式横穴墓



21号墳空中写真 破線は墳丘と周溝の復元線



43号地下式横穴墓 L字形のアゼは調査用のもの



43号地下式横穴墓出土高环

生目 22 号墳（全長 101m）

4 世紀後半

【古墳の概要】

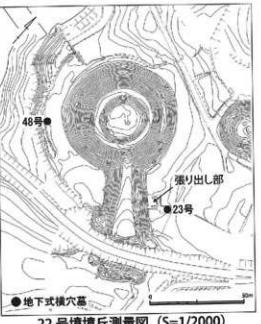
後円部：径 60m、高さ 9.2m
前方部：幅は削平により不明
前方部東側に張り出し部あり
段築構造：後円部 3 段、前方部 2 段か？
葺石：あり
周溝：あり
埋葬施設：レーダー探査で反応あり
おもな出土遺物：鏡羽輪輪

生目 22 号墳は、丘陵南側に位置する生目古墳群内で 3番目に大きな前方後円墳です。墳丘規模は、後円部径 60m、全長 101m を超します。以前は市道を挟んで南側のマウンドが、前方部である可能性が考えられていましたが、調査によって古墳ではないことが判明し、全長が約 10m 小さくなりました。調査は、平成 7 年度、後円部は 3 段築成で、墳丘斜面に葺石、平坦面に敷石を施すことがわかりました。後円部 2 段目テラスにおいて、埴輪埴輪が出土しましたが、調査区内において一ヶ体しか見られなかったため、埴輪の樹立間隔は広いものと思われます。埋葬施設については、地下レーダー探査の結果、後円部中心部において長さ 3m ほどの細長い平面プランの反応があったことから、後円部に構築されている可能性が考えられます。

22 号墳で特徴的なのは、前方部東側に張り出し部を検出したことです。張り出し部は土を盛るのではなく、元々の地面を削り出して造られており、大きさは長軸 4.0m、短軸 2.7m、基底部からの高さ 30 cm、周囲には最大幅 2.0m、深さ 36 cm の「コの字」状の溝がめぐらしていました。溝内から土師器（小型丸底盃、壺、高杯）が出土したことから、何らかのマツリをおこなった場所と考えられます。また、この張り出し部の東側、周溝外側において地下式横穴墓（23 号）を検出しました。検出のみにとどめていたため詳細はわかりませんが、周溝の斜面を利用して構築するタイプの地下式横穴墓と考えられます。

墳丘測量図をみると 3 号墳と同様に、後円部に円形壇のようなものが見られますが、これは戦国時代に 22 号墳が砦のようにして使われたためにできた痕跡です。3 段目斜面の途中に、「築研壠」という V 字の深い掘が掘られておりそれが埋まつたため、現況では円形壇のように見えています。

古墳の詳細についてはまだわからない部分が多くありますが、出土遺物の特徴から 3 号墳と 14 号墳の間に位置づけられ、4 世紀後半に構築されたものと考えられます。



III 基調講演

古墳からみた 4・5 世紀の南九州とヤマト王権

白石 太一郎

1. 南九州の大型前方後円墳

古代日向の地に巨大な前方後円墳をはじめとする数多くの古墳が営まれていることは、早くから注目されていた。中でも宮崎平野の北よりある西都市の西都原古墳群には、墳丘長 180 ㍍の大型前方後円墳である女狭穂塚古墳や墳丘長 175 ㍍の帆立貝式前方後円墳と想定される男狭穂塚古墳という古墳時代中期の巨大古墳がある。この二つの巨大古墳は、ともに九州では最大規模の墳丘をもつ古墳であり、大陸文化受容の窓口になった北部・中部九州にもこのような巨大古墳は、知られていない。

さらに近年では、宮崎平野南部の宮崎市生目古墳群に、古墳時代前期の生目 3 号墳（墳丘長 137 ㍍）と生目 1 号墳（墳丘長 120 ㍍以上）という、やはり古墳時代前期の段階では九州最大の大型前方後円墳が出現していたことが知られるようになった。また、日向のさらに南の大隅（鹿児島県東部）の志布志湾岸の肝付平野にも、大きな前方後円墳が営まれていることは早くから知られていた。最近ではそれらの古墳の年代研究が進み、前期末葉の段階には東串良町唐仁大塚古墳（墳丘長 154 ㍍）が、中期の中葉すぎには大崎町横瀬古墳（140 ㍍）が営まれていることが明らかになった。この唐仁大塚古墳や横瀬古墳も、その時期としては九州最大の墳丘規模を誇る古墳である。

このように、最近著しく進展した南九州における大型古墳の研究の結果、古墳時代前期から中期の段階では、九州最大の古墳がいずれも南九州の日向や大隅に営まれていることが解らなくなってきた。北部・中部九州で最大の古墳は、6 世紀前半の筑紫君磐井の墓と考えられている福岡県八女市の岩戸山古墳（墳丘長 138 ㍍）であるが、それ以前の前期から中期の段階では、九州最大の古墳はいずれも南九州の日向と大隅にみられるのである。ここでは、なぜ九州でも最大規模の古墳が、北部・中部九州ではなく南九州に営まれることになったのかを考えることにしたい。それはまた、地域における大型前方後円墳造営の意味を問うことにもなる。

2. 日向・大隅の大型前方後円墳の性格

日向・大隅地域の大型前方後円墳をそれが造営された年代で整理すると、どのようにになるのであろうか。まず前期の段階では、日向の生目古墳群の生目 1 号墳がおそらく前期前半の 4 世紀前半に遡るものと考えられている。これについて前期後半の 4 世紀中葉～後半には生目 3 号墳が造営される。

さらに中期になると、まずその初頭頃の 4 世紀末葉に、なぜか大隅の志布志湾岸に唐仁大塚古墳が出現する。そして中期前半の 5 世紀初頭頃には日向の西都原古墳群に、九州でもあらゆる時期を通じて最大規模の墳丘をもつ女狭穂塚古墳と男狭穂塚古墳が出現する。

この二大古墳の前後関係については、最近女狭穂塚・男狭穂塚古墳の陪塚的な性格の西都原 169 号、170 号、171 号墳の調査を担当された犬木努氏は、埴輪それ自体からはこの二大古墳の前後関係は決めがたく、ほぼ同時に造営されたものではないかとされている。犬木氏の埴輪研究は優れたもので、その結論は尊重

されなければならないが、私にはこうした巨大古墳が同時に造営されたとは考え難く、他の地域での在り方からも、タテハケ調整の顯著な男狹塚古墳の埴輪の方が、ヨコハケ調整が目につく女狭塚古墳のものより先行するものではないかと、今のところ考えている。そして中期でも中頃の5世紀前半～中葉になると、また大隅の志布志湾岸に横瀬古墳が出現するのである。

このように、南九州の日向から大隅にかけての地域に営まれた大型古墳は、どれ一つとしてほぼ同時期と考えられるものがみられず、少しずつその造営時期を異にしているのである。さらにこうした墳丘長140mをこえるような巨大古墳は、それぞれの古墳が営まれた生目古墳群付近、西都原古墳群周辺、さらには志布志湾岸の小地域の首長墓と考えるにはあまりにも大きすぎる。これらのことから私は、この時期の日向南部から大隅にかけての地域では、この各地の首長たちの間に地域的な首長連合が形成されていて、これらの大型古墳はこの地域的首長連合の盟主の古墳にほかならないと思っている。その盟主権は、これら南九州各地の有力首長たちが交代でその地位に就くような政治体制が想定できるのである。

3. なぜ南九州に九州最大の巨大古墳が造営されたのか

このように、4世紀から5世紀の南九州では、同時期の北部・中部九州ではみられないような広い地域の首長連合が形成されていたことが、その古墳の規模を大きくしたものと考えられる。ただ、それではなぜ北部・中部九州にみられないような広域の首長連合がこの南九州に設立したのかが説明されなければならない。

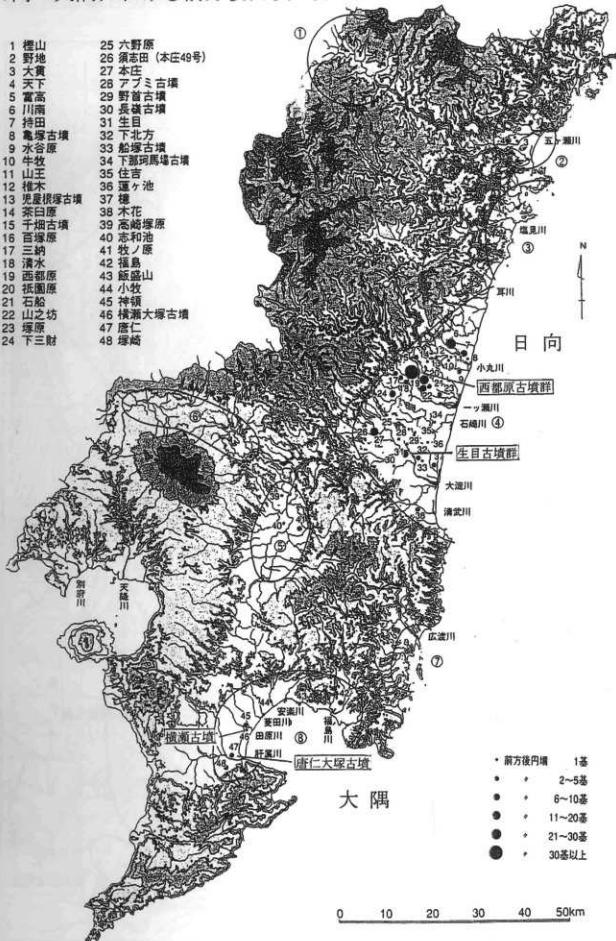
これはきわめて難しい問題であるが、私は、この問題にはヤマト政権と呼ばれる広域の政治連合形成の契機が関係しているのではないかと考えている。ヤマト政権の前身となる邪馬台国連合の形成については、それまで鉄資源などの輸入ルートの支配権を独占していた北部九州に対して、それより東方の瀬戸内海沿岸各地から畿内の政治勢力が安定した鉄資源の人手を確保するため、まさにそのために連合して北部九州から鉄などの輸入ルートの支配権を奪い取るといった出来事があったのではないかと考えている。まさにヤマト政権にとって北部九州は、かつて戦った相手であり、其の動静には絶えず注意を払わなければならない地域であったのではないか。

このようなヤマト政権成立の過程からも、ヤマト王権は、北部九州の背後の九州では南の勢力とより緊密な関係を持つことになったのではないか。記・紀では、日向の地がヤマト王権発祥の地となっている。南九州が記・紀に大きな位置を占めた理由については、そうした想定をする以外に説明できないのではないか。

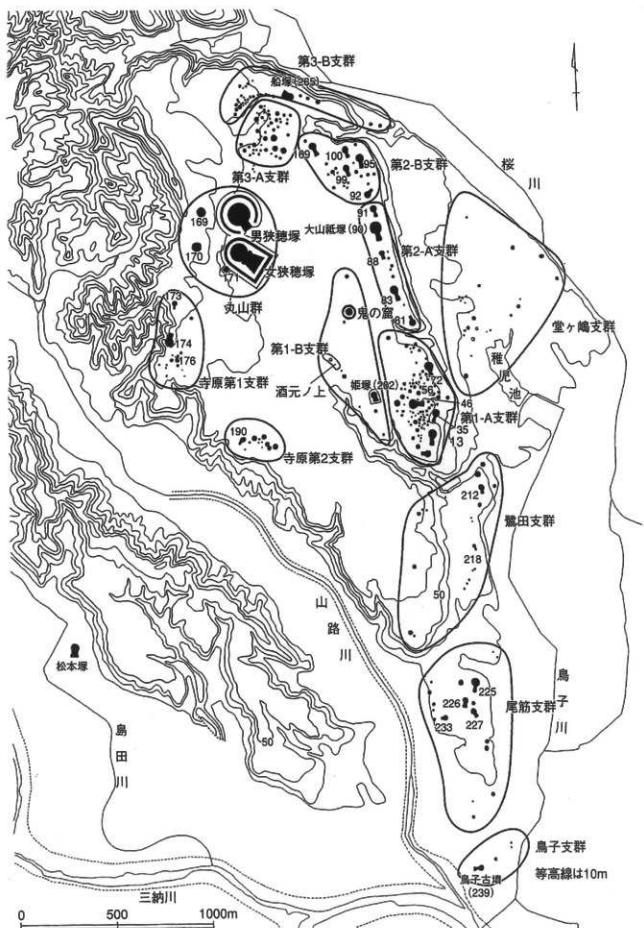
なお、北部九州と同じように、大きな生産基盤を抱えながらも前期・中期にはあまり大きな古墳が造られなかつた地域に瀬尾平野がある。筆者はこの地域を「魏志」後人伝にみられる狗奴國の地と想定しているが、この地域もまたヤマト政権成立前夜に邪馬台国連合と争った地域である。瀬尾平野に前・中期の大型古墳がみられないのも、そうしたヤマト政権成立の前史が深く関わっているのではないか。

『日向・大隅における前方後円墳の分布』

- | | |
|----------|---------------|
| 1 横山 | 25 六野原 |
| 2 野地 | 26 須佐田(本庄49号) |
| 3 木賀原 | 27 本庄 |
| 4 天下 | 28 アブミ古墳 |
| 5 富高 | 29 野曾古墳 |
| 6 川南 | 30 長崎古墳 |
| 7 牧田 | 31 生目 |
| 8 鳥塚古墳 | 32 下北方 |
| 9 水谷原 | 33 船塚古墳 |
| 10 牛牧 | 34 下須崎馬場古墳 |
| 11 山王 | 35 住吉 |
| 12 律木 | 36 運ヶ池 |
| 13 佐原御古墳 | 37 佐原 |
| 14 来臼原 | 38 木花 |
| 15 子宿古墳 | 39 高崎塚原 |
| 16 百家原 | 40 志和池 |
| 17 三納 | 41 犬ノ原 |
| 18 清水 | 42 福島 |
| 19 西都原 | 43 緑盛山 |
| 20 張園原 | 44 小牧 |
| 21 石船 | 45 神領 |
| 22 山之坊 | 46 横瀬大塚古墳 |
| 23 塚原 | 47 唐仁 |
| 24 下三財 | 48 塚崎 |

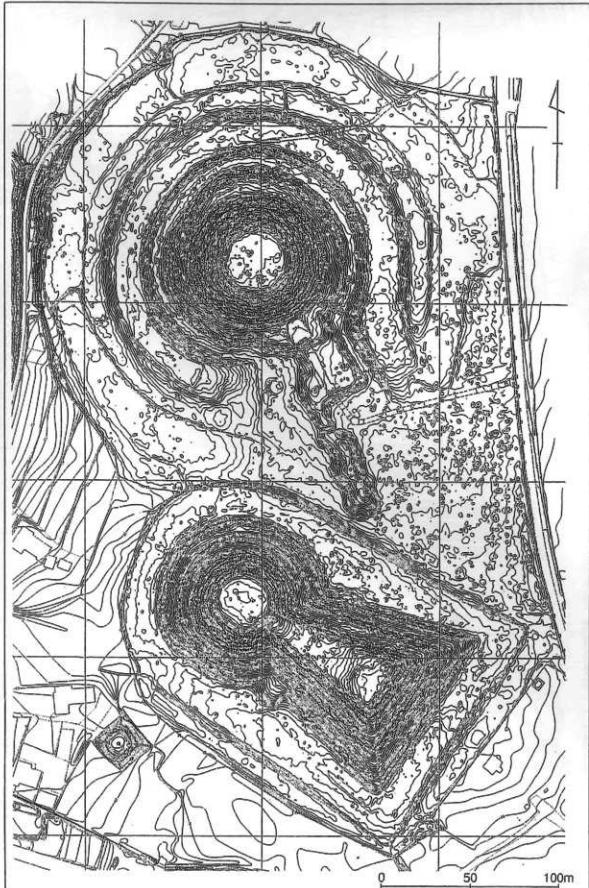


《西都市西都原古墳群》



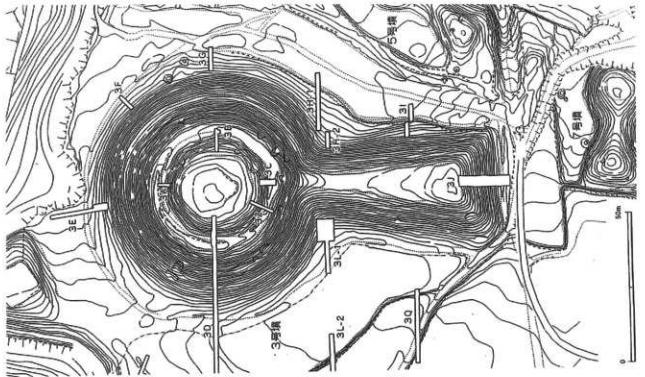
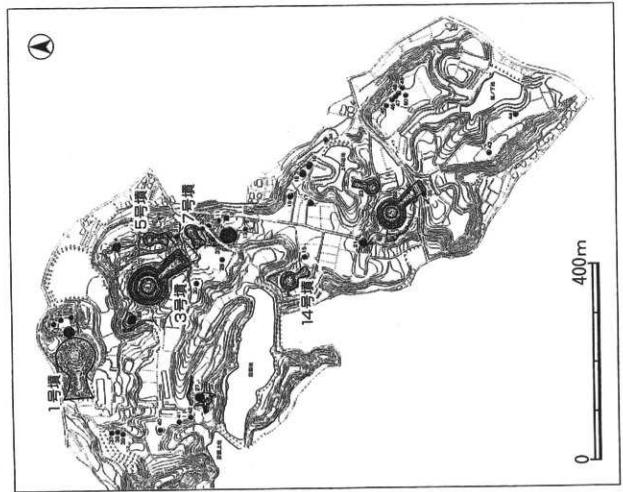
宮崎県西都市西都原古墳群（北郷泰道氏による）

《女狭穗塚と男狭穗塚古墳》



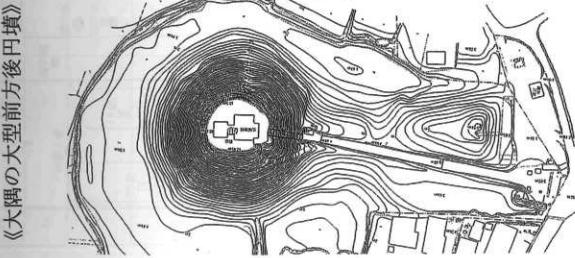
宮崎県西都市女狭穗塚古墳と男狭穗塚古墳（宮崎県教委原図）

《宮崎市生目古墳群》

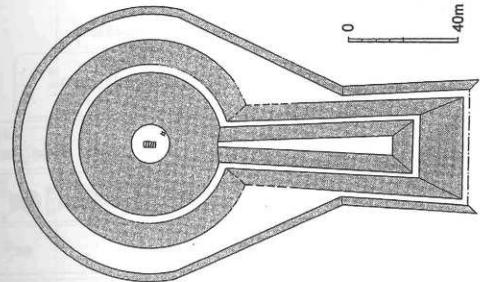


生目古墳群古墳分布図

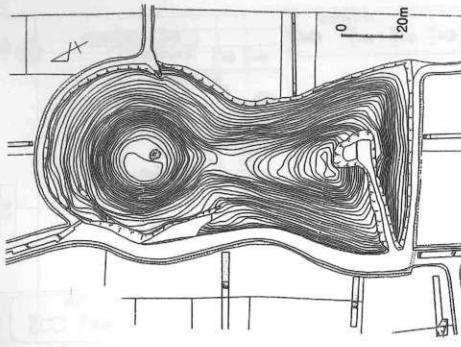
生目3号墳測量図



《大隅の大型前方後円墳》

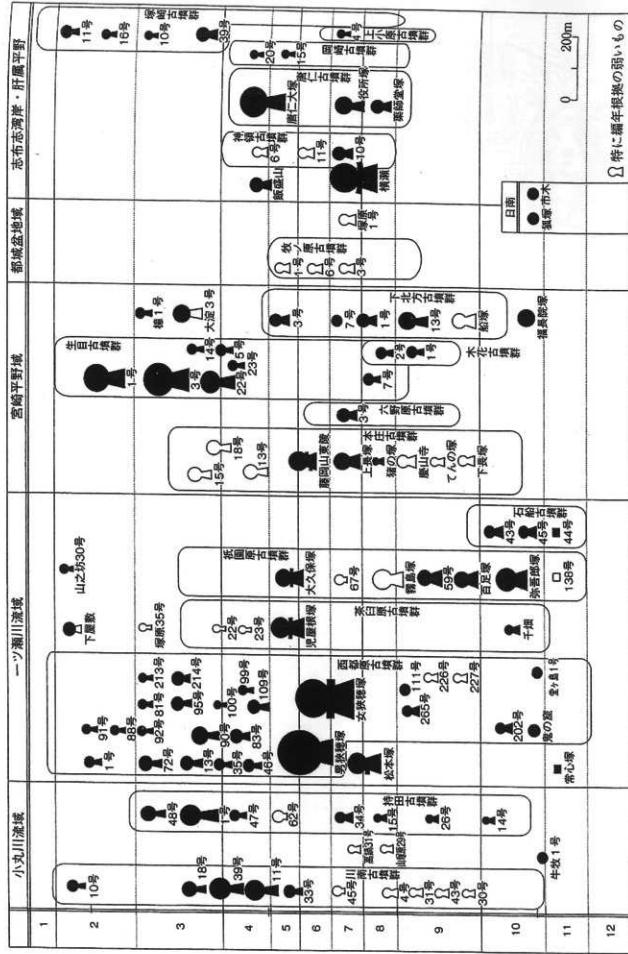


鹿児島県東串良町唐仁大塚古墳



鹿児島県大崎町横瀬古墳

《南九州における大型古墳の編年》



南九州における大型古墳編年図（橋本達也氏による）



生目古墳群シンポジウム 2014

生目古墳群の実像

～15年目の再検討～

一資料集一

平成 26 年 11 月 1 日

発行：宮崎市教育委員会